

倫理法人会の会員特典として倫理研究所が発行し、会員企業の朝礼で活用されている『職場の教養』は、今月号で通巻六〇〇号となり、来月の令和八年一月号で、創刊五十周年を迎えます。

倫理研究所は、倫理法人会が誕生する以前から、職場における「朝礼」の必要性に着目し、その実施を提唱してきました。

昭和三十三年に『十分間の教養集』を刊行し、昭和五十一年には体裁をA5サイズに改め、名称を『職場の教養』として現在に至ります。

以来半世紀、一日一話に「今日の心がけ」を添えるスタイルは変わることなく、多くの企業の朝礼で活用されてきました。

執筆は倫理研究所の研究員が担い、一人が一本、話材を選び一日分を書く方法で続いています。研究員は二カ月に一度のペースで執筆しますが、これは意外に容易なことではありません。三十六文字×十三行の短い文章に「起承転結」を構成し、どの業種・業態のスタッフの方にも共感を得られる内容にし、さらに声に出して読むという輪読のスタイルを前提として、リズムまで整える必要があるからです。

〈これは良い〉と思って書き始めても、一部の業界にしか通じない話になったり、経営者にとっては都合が良くても従業員には不都合な内容になったりと、わずか十三行の中にも葛藤が生じることがあります。

そんな時に有効なのが、思い切って「白紙に戻す」ことです。せっかく書いたもの



行き詰まりは転機 捨てる勇気が未来を変える

を捨てるのは惜しいと感じるかもしれませんが、そうした執着を外し、書き直すか、まったく違う話材でやり直すと、不思議と筆が進むことがあります。

これは単なる技術的な工夫にとどまりません。複雑になった構成をゼロに戻すことで論理の骨格を再発見できるだけでなく、「何とか完成させたい」という心のとらわれを捨てることで、純粹な目的に立ち返ることができるようになります。執着を捨てるほど、文章は普遍性を帯び、声に出して読めるリズムが自然と整います。この発想は、経営や職場の状況にも当てはまるでしょう。

事業やプロジェクトが行き詰まったとき、私たちは「失敗した」と捉えがちですが、実はそれは、資源配分を再設計する合図だといえます。〈投資額くらいは取り返そう〉という思いに固執すると、判断が遅れ、泥沼にはまりやすくなります。

しかし、視点を変えれば、撤退や見直しは敗走ではなく、未来に向けた前進の選択です。捨てるほどに必要なものだけが残り、スピードと納得感が高まります。

半世紀にわたり『職場の教養』が伝えてきた知恵から、こうした「捨てる勇気」や柔軟な発想を学んだ読者も多いでしょう。

明朗な心で目的に向き直り、いま必要な一歩を軽やかに選び取る。その積み重ねが、職場を、そして人生を豊かにしていくのです。さらに、その過程で得られる気づきや学びが、次の挑戦への力となり、成長を加速させてくれることでしょう。